The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大正・昭和初期の服飾における流行の創出 ： 高島屋百選会を中心に
Author(s)	青木, 美保子
Citation	デザイン理論. 2003, 43, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53213
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大正・昭和初期の服飾における流行の創出
── 高島屋百選会を中心に ──

青木美保子／京都光華女子大学非常勤講師

近代日本の服飾史を概観したとき，その先行研究の多くが，前提として大正・昭和初期を洋装が市民層に定着する過程の時期と捉えて，その詳細を検証している。しかし実際には，同時代において，女性の服装の大半は和装であり，洋装はごくわずかであった。

そして当時，その和服模様の「流行」に大きく関与していたのは，大手呉服店から発展した百貨店であった。

元来，「流行」は自然発生的な社会現象であったが，大正初期の頃より，服飾を中心に，消費拡大を目的として，商品の供給者が積極的に「流行」を仕掛け始める。この動向を受けて，徐々に「流行は操作される」という概念が社会に浸透していき，昭和初期には「流行」が新しい商品の傾向であり，供給者，中でも百貨店が流行を発信しているということは，社会通念となっていったようである。このような服飾の「流行」に対する概念の変化は当時の『アサヒグラフ』や『京都美術』など女性雑誌以外の雑誌にも採り上げられており，社会が着目する時代の趨勢であったと推測される。

そこで本研究は，この時期の和服に注目し，その流行を操作していた百貨店のひとつである高島屋の百選会にスポットをあて，新案染織品募集および展示販売の組織である百選会の新図案企画過程の詳細を解明するとともに，和服という伝統的な服飾に展開する新しい図案の傾向とその変遷の要因を明らかにすることを試みた。

流行品開発機関としての百選会

百選会の前身は，明治39年秋に開催された「懸賞ア・ラ・モード新案染織品募集」および「流行品ア・ラ・モード陳列会」である。この組織を基盤として始まった百選会は，大正２年から大正12年までは，毎年春・秋の２回，それ以降は春・夏・秋と年３回開催され，第68回の昭和15年秋まで続くが，大戦を機に，一時中断する。その後，戦後復興第一回（第69回）は昭和23年で，以後平成６年春まで続いていた。

仕組みとしては，百選会委員会を中心に組織され，東京女子師範学校教授で心理学者の菅原教造，京都市立絵画専門学校教授で美術史家の中井宗太郎をはじめとする顧問も加わって，募集内容が検討され，毎回，趣意書としてテーマと詳細な解説が提示された。大正10年からは趣意を徹底させるために，主に社員によって制作された標準図案が添えられるようになった。これらを基に，染織業者は作品を制作し応募した。そして集まった作品の中から優秀なものが入選品として，京都，大阪，東京各店の陳列発表会で展示販売されたのである。

百選会成立前史 ── 百選会に至るまで ──

百貨店の前身である大手呉服店の中では，比較的後発であった高島屋は，明治初期の頃より，京都画壇の大家に依頼した下絵をもって，付加価値の高い染織品を制作し，国内外で開催された数々の博覧会に出品を重ねていった。

この時期の商工会において博覧会は有効な

広告宣伝の手段であり，高島屋は美術工芸品の開発によって，博覧会で名声を得ることで，染織業界での地位を築いていったと推測される。

さらに，高島屋は博覧会をきっかけに，海外にも事業を拡大する。この貿易事業の関係から外国事情に精通し，収集した西欧の最新情報を，新しい商品開発の参考にしていたのであった。

また，高島屋は他の大手呉服店に先駆けて，明治中期の頃より度々染織品や図案の懸賞募集を行っている。この懸賞募集によって新機軸を開発するという方法は，大正初期には，工芸界で通例化しつつあったようである。その動向に合わせるように発足した百選会は，高島屋の募集としてこの時点で，すでに20年に亘る実績と十分な評価を得ていたことになる。

百選会の図案傾向

百選会の図案傾向の分析は，高島屋資料館に保存されている『百選会図録』，『百華新聞』，『新衣裳』を主な資料とした。

資料を調査した結果，大正２年から大戦前までの期間において，大きな傾向の変化を捉え，７期に分けることができたので，考察はこの区分に沿って行った。紙面の都合上以下，その区分とその時期の主な特徴のみを記しておく。

第一期・大正２，３年頃
　西欧の美術工芸や絵画に注目
第二期・大正４年頃から大正10年頃まで
　日本の伝統図案に注目
第三期・大正11，12年頃
　西欧美術を思わせる意匠
第四期・大正13年頃から昭和２年頃まで
　一科二科制の導入
　一科は日本の伝統的意匠
　二科は西欧文化を受容し，斬新な傾向
第五期・昭和３年頃から昭和６年頃まで
　一科は日本の伝統的意匠
　二科は西欧の伝統的意匠
第六期・昭和７年頃から昭和13年頃まで
　一科二科制の廃止
　国粋的傾向
第七期・昭和14，15年頃
　戦争に向け，国家の指針に依拠した傾向

新図案創作の手段

以上の変遷を俯瞰してみると，西洋という異文化と，日本の伝統的意匠，その二つの発想源が複雑に絡みながら，短い周期での展開を見せていることが分かる。

この時期の社会は，西欧の文化を，憧憬をもって受容しようとする心理と，世界を認識することで日本の伝統を自覚し，その過去の美意識を守ろうとする精神がせめぎあっていたところにその特徴がある。この複雑な社会心理が和服の図案にも反映していたと捉えることができよう。

さらに，百選会は，西洋と日本の意匠を源泉にしながらも，そこに変容の操作を加えることで，和服という伝統的形態に対応する図案，あるいは新しい時代に即した図案の創造を常に意識していたようである。

日本の長い歴史の中で培われてきた和服の伝統は，西洋の影響が極めて顕著なこの時期においても，その形態を容易に変化させることはなかったが，時代と共に常に変化してきた図案に関しては，社会を反映させる装置として，百貨店の商業的戦略の有効な武器となった。こうして百選会は社会動向の分析を基に時代の求める意匠を導き出し，西欧の異文化と日本の伝統を源泉に新奇性に富んだ意匠を展開していたのであった。